



京都大学フィールド科学教育研究センター
Field Science Education and Research Center
Kyoto University

はじめに

現在、京都大学フィールド科学教育研究センター『木文化プロジェクト』では、京都府由良川流域と高知県仁淀川流域の二つの流域を対象として研究活動を行っています。プロジェクトは、健全な森づくりが下流環境の改善に貢献することを科学的に実証するとともに、林業の活性化に貢献する仕組み作りを模索しています。その際、今後どのような森づくりを行っていけばよいのかを、実際に山林を所有なさっている皆様におたずねする必要がありますと考えました。そこで両流域の最上流部に位置する京都府美山町と高知県仁淀川町にて、これからの山づくりに最も近い立場にいらっしゃる皆様を対象とするアンケートを企画いたしました。

対象

美山町森林組合のご協力を得て、2012年10月に組合員の皆様1,130名を対象とする「美山町の森とくらしに関するアンケート」を実施させていただきました。

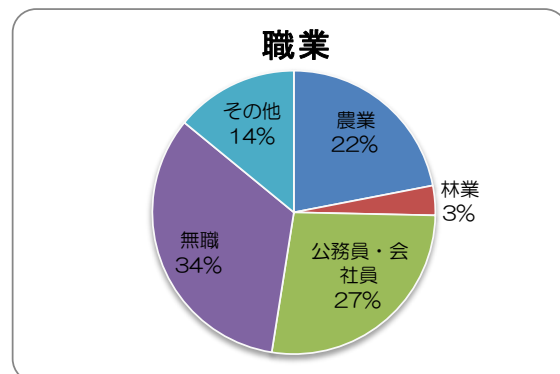
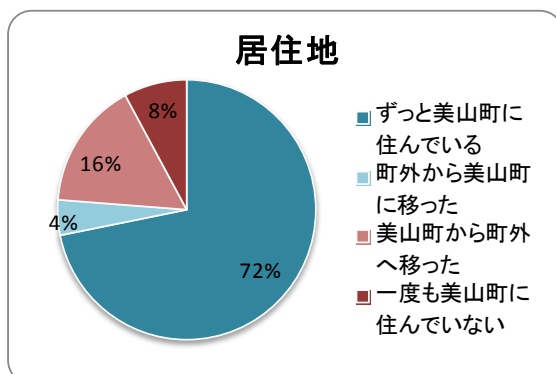
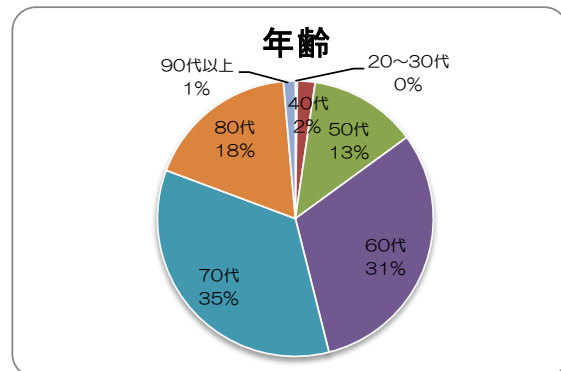
その結果、460名の方からご回答をいただくことができました。お忙しい中ご協力いただきました方々には深く御礼申し上げます。ただいま集計と詳細な分析を行っている最中ですが、速報版として結果の一部をご紹介します。(*なお、数値は速報値のため今後修正される可能性があります。)

ご回答いただいた方々について

ご回答いただいた方の約8割が60代以上、9割が男性でした。

ずっと美山町にお住まいの方がほとんどでしたが、一部、町外から移住されてきた方もいらっしゃいました。また、美山町から町外へ移住された結果、遠方からの森林管理を余儀なくされている方もいらっしゃいました。

職業別では、お仕事として農業をなさっている方が21%、林業をなさっている方は3%でした。



アンケート結果

1. 所有山林の現状

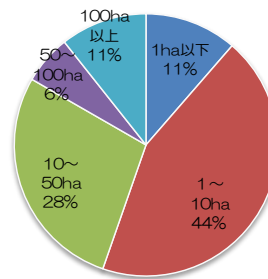
「所有山林に関する質問」より

山林面積： 10ha以下の小規模山林を所有される方が半数以上でした。所有形態としては、個人所有の山林に加えて共有林もお持ちの方が6割近くおられました。

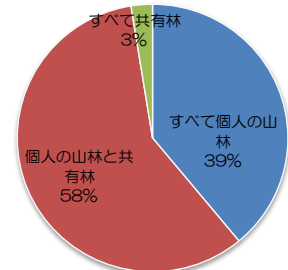
植栽の様子： スギとヒノキを植えていらっしゃる方が大半で、ともに8割以上いらっしゃいました。それらを中心に、マツや広葉樹等を合わせて植栽されているようでした。その他の樹種には、キリ、モミ、ケヤキ、タケなどがあげられていました。

取得方法： 先代からの相続によって取得なさった方が9割以上でした。取得の時期は戦前がもっとも多く、その後、昭和40年代から昭和50年代にかけてやや増加傾向でした。特に、昭和50年代に山林を取得された方は、約6割が相続以外の方法（ほとんどが自身による購入。一部譲渡）にて取得なさっていました。その後、平成以降にも再び取得が増加していますが、相続がメインとなり自身での購入は3割程度となっていました。

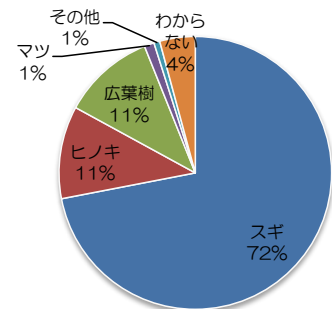
所有山林面積



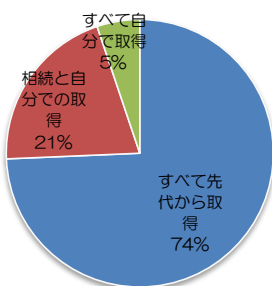
山林の所有形態



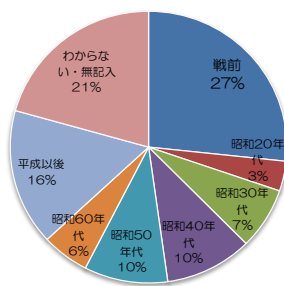
所有林に最も多い樹種



取得方法

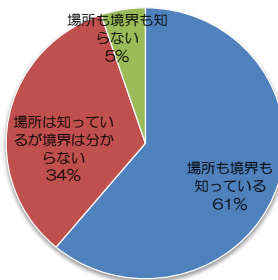


取得時期

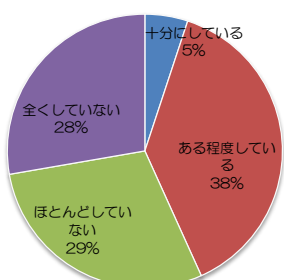


境界の把握： 所有山林の境界については、ほとんどの方はご存知でしたが、約4割の方は境界が分からないとお答えでした。

場所と境界の把握状況



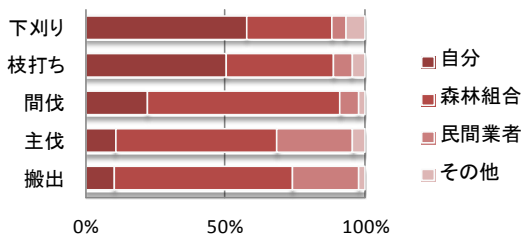
所有山林の手入れ状況



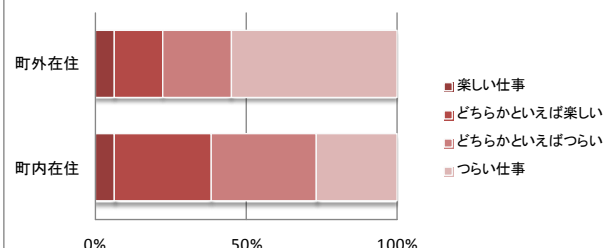
管理状況： 山林の管理状況に関しては、過半数の方が手入れができていないとの回答でした。ご自身で定期的に手入れをなさっている方もおられますが、間伐や搬出など労力と費用のかかる作業は森林組合に委託されている場合が多いようです。また、町内にお住まいの所有者でも、高齢による体力と経済の問題から、すでに山林の手入れを行っていらっしゃらない場合もあるようです。

森林の手入れのイメージ： 森林の手入れについて、つらい仕事であると捉えている方が多いようでした。特に、町外にお住まいの方のほうがそのようなイメージをお持ちでした。

手入れ作業の実施者



所有山林の手入れに対するイメージ

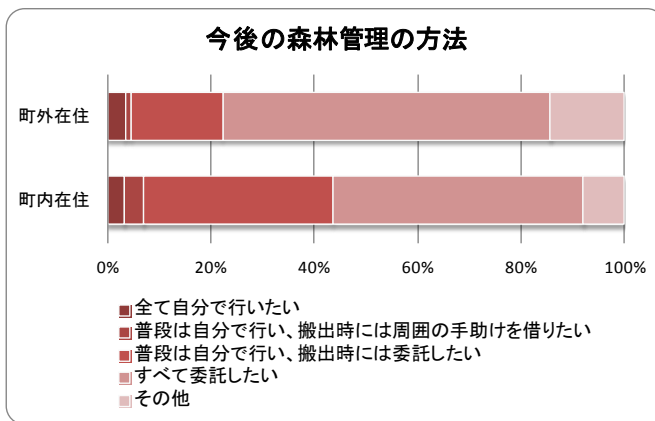
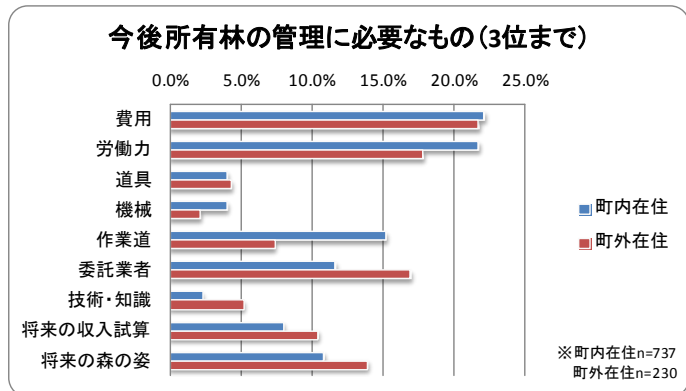


2. これからの山づくり

「今後の所有林管理に関する質問」より

今後の管理に必要なもの： 今後、ご自身の所有林の管理に必要なものをおたずねしたところ、美山町にお住まいの方では1位「費用」、2位「労働力」、3位「作業道」となりました。一方、町外にお住まいの方では、3位に「委託業者」があがりました。どちらにお住まいの方も、管理不足を解消するために、まずは経済的な援助と人手を必要とされていることが分かります。

また、「将来の収入試算」や「将来の森の姿」の情報提供も次いで上位にあがっており、所有林の将来を見通しつつ、可能であれば一定の収入が見込めるような管理・経営を望まれている様子が見えます。



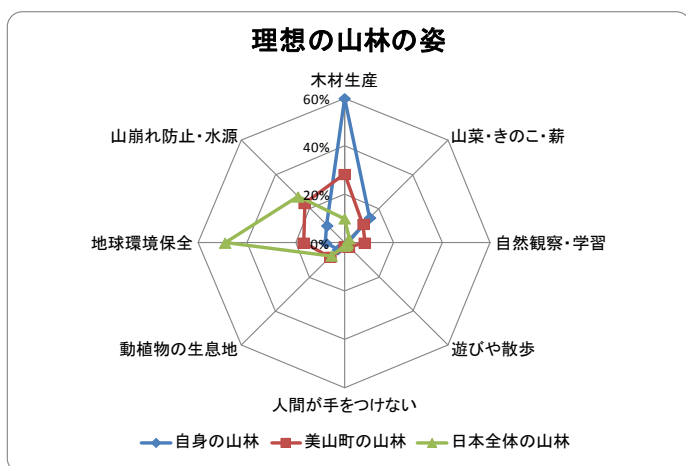
管理の方法： 美山町内にお住まいの方のうち、約半数は何らかの形でご自身が森林管理に関わりたいとの回答で、意欲の高い方が多くいらっしゃいました。

しかし、町内・町外のどちらでも、日常の管理から伐採まで全て誰かに委託したいと考えていらっしゃる方が最も多くなりました。管理を任せてもよい相手としては、9割以上の方が、森林組合と回答しました。最も身近な頼れる存在として、今後も森林組合には大きな期待が寄せられています。

理想の山林の使い方： 山林には様々な利用の方法があります。例えば、木材生産や山菜・きのこ・薪採りなどは、森の恵みを直接利用する点で価値があるといえます。また、地球環境保全や動植物の生息地などは、直接人間が森の恵みを受けるわけではありませんが、森の存在そのものに価値があるといえるでしょう。

「あなたにとっての理想の山林とはどのような山林ですか」と、「ご自身の山林」、「美山町の山林」、「日本全体の山林」のそれぞれについておたずねしたところ、3つの森には期待される姿がやや異なっていることが分かりました。

右のグラフからは、「ご自身の山林（私有の森）」では、前者の利用価値が理想とされ、「日本全体の森林（公共の森）」では後者の非利用価値（存在価値）が理想とされていると言えそうです。また、美山町の森は外の2つと比較すると、自然観察・学習、遊びや散歩などの場として活用することがのぞましいと考えられているようでした。今後の森づくりのヒントになるかもしれません。

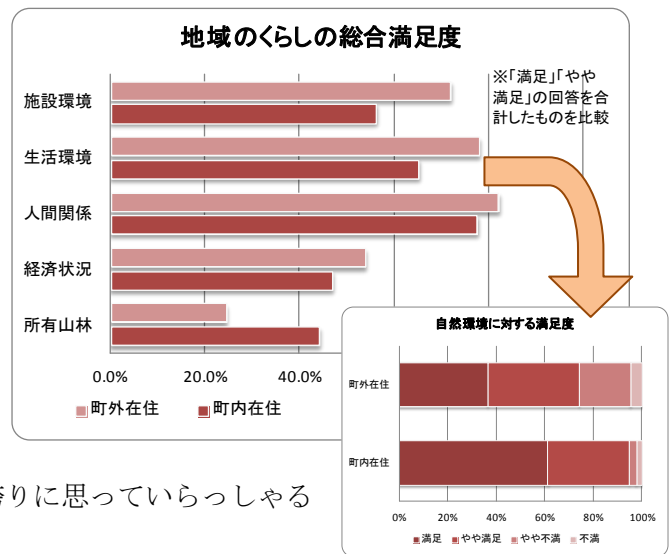


3. 地域の暮らし満足度

「暮らしの満足度に関する質問」より

町内在住者と町外在住者とで地域の暮らしに対する満足度を比較すると、美山町外にお住まいの方が満足度が高いという結果になりました。特に、施設の充実など利便性での満足度が町外で高いようです。ただし、「所有山林」に対しては美山町内にお住まいの方が満足度が高くなりました。

一方、「生活環境」の中の「自然環境」に対する満足度では、町内にお住まいの方の満足度が非常に高い傾向が見られました。「今後なくなって欲しくないもの」として、豊かな緑、川、澄んだ空気などをたくさんの方があげられていたことから、美山町にお住まいの方々が周囲の自然環境を非常に大切に、また誇りに思っている様子が見られました。



おわりに

今回のアンケート調査で、美山町に森林をお持ちの皆さんが森林を維持するために大変苦心されていることが分かりました。中には、「もう山林を手放してしまいたい」「寄付したい」とのご意見や、境界問題に対する深刻な状況もお知らせいただきました。しかし一方で、皆さんが美山町とその森を非常に大切に思っていること、そしてその存続に大きな危機感を抱いていることも分かりました。

また、「今回の調査結果を今後の山林活用や木材利用をのぞましい形でおこなうためにぜひ有効活用していただきたい」とのご意見や、「このようなアンケートだけで表現できるほど現実には甘くない」等々、幾多の叱咤激励のお言葉もいただきました。お答えいただいた方々にはご高齢の方が非常に多く、内容に分かりにくい点多々あったことと思われ大変反省しています。しかし、こうして多くの方々からお返事をいただいたのは、皆さんが本当にこれからの山づくりを真剣に考えていらっしゃるからに他ならず、プロジェクトメンバー一同、益々頑張らなければという気持ちです。今後も木文化プロジェクトは、皆さんのご意見をお伺いしながら研究をすすめていく所存です。



「木文化プロジェクト」とは？

—「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業」文部科学省概算要求事業 2009 - 2013

日本の自然環境は、常に人間活動によってその姿を改変されてきました。森林もその例外ではありません。しかし、現在国土の27%（約1000万ha）を占める人工林のうち、65%は管理不足による荒廃が進んでいます。その結果、土砂災害などの自然災害、あるいは生態系バランスの崩壊、さらには農山村の荒廃を引き起こす要因の一つともなっています。

木文化プロジェクトは、疲弊した森林を適切に管理し直し、本来の森・川・里・海の繋がりを再生することで、先人達の残した大切な森を守り、自然環境と共生する「地域循環木文化社会」の創生を目指す、学術的な研究プロジェクトです。その基礎とするのは、京都大学が提唱する「森里海連環学」の思想です。

【※「森里海連環学(もりさとうみれんかんがく)」は、京都大学フィールド科学教育センター（2003年4月発足）が提唱する新たな学問領域の名称です。森から海までを一つの繋がり（連環）の中で捉え、その仕組みを解明し、持続的で健全な国土環境を保全・再生するための具体的な方策の提案を目指します。】

- ◆ 統括責任者：柴田昌三（京都大学フィールド科学教育研究センター、センター長・教授）
- ◆ サブリーダー：【由良川プロジェクト】吉岡崇仁（同上、教授）【仁淀川プロジェクト】長谷川尚史（同上、准教授）
- ◆ 構成主体：京都大学フィールド科学教育研究センター
連携融合先：京都府、高知県、舞鶴市、高知市、仁淀川町

- ◆ お問い合わせ
京都大学フィールド科学教育研究センター 森里海連環学プロジェクト支援室
〒606-8502 京都府京都市左京区北白川追分町
電話 075-753-6434 FAX075-753-6451
メール proshien@kais.kyoto-u.ac.jp
ホームページ <http://fserc.kyoto-u.ac.jp/proshien/kibunka/index.html/>

